
まさらかなトゲ

静野 たける

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まつさらなトゲ

【Nコード】

N51020

【作者名】

静野 たける

【あらすじ】

主人公がなんやかんやで決意する話。

（前書き）

続きそうな短編です。

十中八九続き書くんですが、訳あって公表するかは未定です。ですが、今の段階でのこの作品を見ていただければ幸いです。

入学から二ヶ月、高校生となった僕もそろそろ自分の立ち位置に慣れだした頃だ。時刻は朝八時前、まだ学生が登校するには早い時間帯に教室の引き戸を開ける。すると、教室には既に一人の男子生徒が気怠げな仕草で窓際の机に突っ伏していた。

「おはよう、間内」

気怠げな男子生徒、間内祥平に僕はいつも通りの調子で挨拶する。

「おつす、相変わらず早いな八坂」

そんな風に言うけど、僕は一度も間内より早い時間に登校したことがない。二人とも帰宅部で朝練という学生の醍醐味とは無縁な生活なのに。

僕が早く来るのは単純に家が近いというのが理由だ。すぐに登校できる距離だからこそ気を抜くと簡単に寝坊してしまう、だからこの時間をキープしてるというわけだ。

対する間内はというと、学校から二駅ほど離れたところから来ている。その境遇でこの時間に登校というのは結構な早起きなのだが、いつも怠そうな彼は見ての通り朝が苦手だ。それなのに毎日必死でこの時間に登校している。

「間内のが早いでしょ、いつも通り。いい加減ゆっくり先輩と来れば良いのに」

僕は間内の前の自分の席に座りながら苦笑する。だがその冗談は間内には笑えないらしく肩を震わせながら恨めしげに僕を見てくる。「ふざけるよ……朝っぱらからあいつと一緒に俺が過労死する」そんな大袈裟な。そう思いながらうんざりといった表情の間内を見て笑い、そこから何気なく教室の引き戸に視線を移す。すると朝の静かな空気に似つかわしくない、ドタドタといった足音が聞こえてくる。

入学当初はこの足音に驚いたり訝しげになったりしたが、もう慣

れたものだ。

この足音を聞いて、僕は再び間内の方を見る。さっきまで憂鬱そうに机に突っ伏していた間内だったが、今はその表情が七割増くらい暗くなっていた。それを見て僕は苦笑しながら間内に語りかける。そう、いつも通りに。

「先輩、来たらしいね」

その言葉に間内は信じたくないとしても言うように首を横に振る。でもこの足音は現実だ。音が次第に大きくなり、その主とはもう目と鼻の先というほどの距離にまでなった次の瞬間、僕らの教室の引き戸は豪快な音を立てながら開けられた。

「しょおちゃん、また今日も先に行つて！ いつも一緒に行こうつて言つてるでしょ！」

扉を開けた伸びのある高い声をした女子生徒は、叫びながら間内の方に走り寄つてきた。彼女を見て間内は顔を曇らせ、さっきまで他人事だった僕もその勢いに圧倒されていた。うん、まだ慣れないな先輩のこの調子には。

「おはようございます、日々野先輩」

異様に沈んでいる間内、異常にテンションの高い日々野先輩の緩和剤になるべく、僕が柔らかく挨拶する。それで少しだけ、このいい具合に混沌としていた教室の空気も和らいだ。

「うん！ 八坂君は元気で良いね！ しょおちゃんも見習いなよ」「留美、とりあえずしょおちゃんはやめろよ」

幼なじみのこの無駄に高いテンションにはもう諦めがついたのか、いつもの気怠げな調子で間内が咎める。しかしこんなやり取り日常茶飯事だ。日々野先輩も咎められて反省なんて一切しない。

「何言つてんの、十六年間ずっとしょおちゃんでしょ！ 今更恥ずかしがらなかつたっていいじゃん！」

二人とも、ずっとこんな調子なんだな、なんてむしる僕は感心する。

「先輩と間内ってそんな古い付き合いなんですね」

僕の口から漏れた感想に、間内はただ迷惑そうに呟いた。

「親同士が友達ってろくなもんじゃねえぞ。そのせいでこいつのお守りだ俺は」

参ったような様子で、間内は突っ伏していた身体を起こす。日々野先輩は間内の一言につきー！なんていいながらお守り扱いを抗議していた。

朝なのに朝じゃないような空間、端から見れば多少おかしなこの状況も、二ヶ月過ぎた僕にとってはすっかり日常になってしまっていた。

間内祥平はひたすら気怠い表情をしているような男子だ。ここ二ヶ月ほぼ学校生活を共にしてきたが、基本的にいつも何もしたくない、といった表情をしている。しかしポテンシャルは高く。怠そうな仕草を咎める意味で教師に指された問題は難なく解答し、体育の最初の授業でやったスポーツテストでも学年トップクラスの能力を見せつけた。そんな経緯があつて、一年生の間でも割と注目されている男子だ。そして、そんな間内が更に目立つ要因として、今横でひたすら間内に抗議している、日々野留美先輩が真っ先に挙げられる。

日々野先輩は二年生ながら生徒会の副委員長、運動勉強共に学年トップクラスを維持する秀才だ。その上あのハツラツとした性格にショートヘアの美人ときている。去年の時点で日々野先輩は有名人だったみたいだが、数多の男子生徒の告白を一蹴し続けてきたらしい。そんな日々野先輩が今年になっていきなり一人の男子生徒、間内を気にかけているのは必然的に間内も有名になるというものだろう。しかも間内自身も百七十五センチはあるスラッとした体格に、怠そうにしていて目立たないがアイドル並みに整った顔立ちをしているから、他の男子生徒の妬み、僻みの絶対の対象として君臨している。

ちなみに、僕と言えばびっくりするくらいの没個性だ。その一行で説明が終わるほど特に言う事がない。

とにかく平凡な僕には勿体ないくらい、周囲は暴力的に騒がしい。雑談もほどほどに、日々野先輩の恒例行事が始まる。

「そっぴやしょおちゃん聞いた!? 隣のクラスの田原さん、茶道部の大貫君に告白されたらしいよ!」

「あ、そう」

「それはそうと三年の今井先輩、お風呂屋さんでバイト始めたってさ!」

「へえー」

「待ってこれすごい話。現国の鈴木先生、授業中に自分は火星人大一って叫んだらしいよ! 意味分かんないよねー」

「そっだねー」

これが日々野先輩の恒例行事。うわさ話披露だ。校内で無駄に顔が広い先輩だからこそ知れる数々のうわさ話を何故か朝、間内に報告するのだ。

しかし、間内はうわさに一番興味のない人種。とりあえず相づちを打つが、それを掘り下げるといふ事は一切しないで済ませる。それを十分二十分と続けていくのだ。毎回思っけど、毎日違ううわさを仕入れる日々野先輩の情報量とそれに一切関心を向けない間内の無頓着さにはただ驚かされる。

おはよー、なんて挨拶をしながら他のクラスメイトも顔を見せ始める。もうそんな時間か、なんて思いながら時計を確認するとあと少しでホームルームが始まる時間にまでなっていた。しかし日々野先輩の話はまだ終わる気配がない。

間内は疲れた表情をしているが。

僕以外のクラスメイトも、最初こそ学校のアイドル日々野先輩がクラスに来ている状況に驚いたり、下心がある男子は果敢に話しかけたりしていたが、うわさ話をしている時の日々野先輩は間内以外

一切視界に入っていないのだ。

普段はすっかりした人だけど、このときだけは話しかけられても気づかないし、時間や周りの変化も意に介さず話し続ける。それを終わらせる手段はただ一つ。

「それでね、それでね！ えつと……」

「はあ……留美」

間内に呼ばれ、話し続けていた日々野先輩の顔が明るくなる。

「なに？ 何か気になる話あった！？」

「うぜえ、お前そろそろ自分の教室戻れよ」

これが先輩のうわさ話を終わらせるただ一つの手段。間内による打ち切りだ。この無慈悲な切り捨てで先輩は我に返る。そして次第に顔を歪ませる。

「しょおちゃん、そんな……そんな言い方ってないよ！ うええええええええええんっ！」

クラス全員が呆気に取られているうちに、日々野先輩は叫びながら教室を走り去って行った。くあー、なんて言いながら間内は伸びを始めていた。朝から疲れたといった様子だ。確かに、この日々野先輩が出て行く様も、日常と言えば日常なのだが、これだけは未だに慣れないでいる。

「毎度の事なんだけど、いいの？ 日々野先輩放つといて」

心配しながら間内に問いかけるが、本人は欠伸をしながら一切気にしていない風で口を開く。

「いんだよ。いつもいつも嘘泣きで締めてるんだから。ほっとけ」

毎日同じ事を聞くが、毎日同じ答え。そっか……そう言っ僕も自分を納得させる。ホームルームまであと十分。僕はトイレに行くべく席を立った。引き戸を開ける瞬間、何気なく後ろを振り返ると既に間内は寝始めていた。

教室を出て、廊下を少し歩いた先にある男子トイレにたどり着く。走り去るときの日々野先輩の表情、あれが忘れられず悶々としながら用を足す。

何も考えずに手を洗いトイレを出ると、向かいの女子トイレから丁度今まで考えていた人物、日々野先輩が出てきた。

「あ、八坂君。しょおちゃんどうしてる？」

いつもと同じ綺麗な顔にハツラツとした表情。ただよく見ると微かに目は充血し、目の下は拭ったかのように赤くなっていた。

「さつき眠そうにしてたので、多分もう寝てますよ」

そかそかあ！ なんて言って笑っている先輩。いつもと違うように見える先輩を見て、流石に僕は指摘するしかなかった。

「先輩、毎回泣いてるんですか？」

日々野先輩は最初驚いた顔をしていたが、すぐに苦笑に切り替えた。

「あは、八坂君意外と鋭かったりするんだあ……」

廊下の人通りが多い、だけど僕らの間は切り取られているかのようになんか静かだった。

「何故ですか？ 先輩は何故そこまでして間内を気にかけるんですか？ いくら間内が幼なじみ、好きな人でも気にし過ぎですよ」

入学二ヶ月、知り合っただばかりの先輩に向かってなんて生意気な口だろう。そう自覚はしても止まらなかった。僕は今までしたことのないほど真剣な顔で問い、日々野先輩もいつもの明るい調子を潜め、真剣な顔をしていた。

「八坂君、少し勘違いしてるよ」

「え？」

勘違い、その発想はなかった。そう指摘され、僕は間抜けな声を出す。そして下手に何か言う事無く、先輩の言葉を待った。

「良く勘違いされるけど、私は別にしょおちゃんが好きってわけじゃないんだ」

僕は目を見開いて驚いた。そここそ一番分かりやすい想いだと感じ

じていたから。しかし、そうになると余計に疑問を抱く。先輩にとって間内はなんなのか。

「先輩、良ければ答えてください。何故先輩は間内を気にかけるんですか？」

僕の問いに、先輩は深く考えるように目を瞑った。数十秒と時間が過ぎ、僕はただ待っていたがその僕を、先輩の大きな瞳が真正面から捉えた。

「八坂君はしょおちゃん……祥平と仲が良いもんね。だからいっけど、あの子、どうしようもなく他人に興味が無いの。病的なまでにね」

「……え？ だって、普通に僕とも話すし先輩とも話しているじゃないですか」

いきなり自分の友達が人に興味がない。そう言われて信じることもなんて出来ず、しかしその真剣な瞳が嘘を吐いているとも思えず、僕はただ反論する。

「中学の頃はね、学校で一言も話さない子だった。他の人たちが失語症なんじゃないかと疑ったくらい。だけど祥平の両親や私がずっと言い続けて、高校ではやっと普通に話すようになったの」

嘘くさい。普段の僕ならすぐにそう思った。だけど、それは妙にリアルで心に語りかけるものがあった。そして、頭の中で先輩の行動理由を理解した。

「だから先輩は、間内に色々な人のうわさを話していたんですか？ 切なげに笑いながら、先輩は頷く。

「今もあの子は他人に興味を抱けないでいる。それは、他人の気持ちを考えられないってことでしょ？ 私は、あの子がいつか何も考えずに誰かを傷つけるんじゃないかって怖い」

自分の肩を抱きながら、先輩がポツポツと呟く。僕はそんな先輩

を見て、自分でも何か出来るんじゃないか？ そう、純粹に思った。
「先輩が間内を気にかける理由は良く分かりました。だから提案があります」

日々野先輩が小首を傾げる。僕は誰にも気づかれずに追いつめられていた先輩を安心させるように、精一杯笑って言い放った。

「僕も参加します。間内の根性、叩き直します。だから先輩一人で悩む必要はもうありません」

先輩は驚いているけど、僕はもう決めた。だから笑う、それが一番の答えだ。

「八坂君、どうして？」

こちらの出方を見るように、先輩が僕に問いかける。僕は大人でもなければ、聖人君子でもない。ましてや先輩が好きになわけでもないし、間内と深い付き合いでもない。だから、僕が動く理由はたった一つ。

「僕がただ間内祥平と親友になってみたい。それだけですよ」

それだけ言っつて、頭を下げて教室に戻る。一度振り返ると日々野先輩が涙を浮かべながらこちらに微笑み、そして自分の教室に戻るべく歩き始めた。

「つまりはそういうことだ」

地面に向かつて呟く。他人に興味が持てない？ 面白いじゃないか。そんな人間がいるなら、是非親友になりたいね。間内が本当に普通じゃない人だっつていうのなら、僕自身が間内の「矛盾した存在」ウィーク・ポイントになっつてやる。

だっつてそれ、最高に面白いだろ？

引き戸を開け、自分の席に戻る。間内は珍しく起きていた。

「ずいぶん長い便所だったな」

こんな普通の会話も、形だけだと分かると空しくなる。だからこそ、間内祥平の親友になると決めた。そのための第一歩を、僕は踏み出した。

「間内、お前。他人に興味が持てないんだってな」

……彼は静かに僕を眺め、そして邪悪に口を歪ませた。

「なんだ知ったのか、精一杯友達してたのに残念だよ。八坂光一」
間内のその顔を見て僕は興奮する。平凡な僕の中に、^{トゲ}1刺激が生まれ瞬間だ。

……全く、実に面白い学校生活になりそうだよ。

(後書き)

読了ありがとうございました。

いかがでしたでしょうか？

個人的にそこそこの出来ではあったので楽しんでいただけただけのなら
ものすごい嬉しいです。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5102o/>

まっさらなトゲ

2010年10月25日15時40分発行